

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：82620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00158

研究課題名(和文) 常磐津節の音楽分析のための基盤研究

研究課題名(英文) Basic research for music analysis of Tokiwazu-bushi

研究代表者

前原 恵美 (Maehara, Megumi)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・室長

研究者番号：70398725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：公刊楽譜がほぼない常磐津節について、儀式性の高い「祝儀もの」や、劇的で筋立てが明確な「時代物」等の特徴的な作品群から第三者の検証可能な音源による比較分析を行い、各演奏に共通する骨格部分と、表現の幅が許容されている部分を明らかにし、音楽構造上、または詞章内容に照らした表現上の役割や効果を解明してきた。

最終年度は、今後の研究の展開を見据えて、現在ほぼ伝承されていない富本節、常磐津節、清元節の豊後三流に共通の作品群「山姥もの」に着目し、それぞれの音源を比較分析し、三流の詞章構成上の特徴、共通する詞章部分の浄瑠璃パートと三味線パートの関係性を明らかにし、当該研究の手法を展開させる端緒とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、いまだ口頭伝承が主流である常磐津節の音楽分析の手法を、異なる特徴を持つ作品群で実証しながら提示した。また同様の手法を用いて、富本節のように稀少音源が残るのみで伝承が危機にある音楽を含め、歴史的に近い関係にある豊後三流の詞章の変遷、共通詞章に対する浄瑠璃パートと三味線パートの関係性について比較検証を行い、それぞれの特徴を明らかにする一つの道筋を示した。

研究成果の概要(英文)：A comparative analysis of the Tokiwazu-bushi, for which few scores have been published, was carried out using audiovisual material such as ritualistic festive pieces and period pieces with a clear dramatic character. The common framework and range of permitted expressions in each performance were then clarified, and the expressive roles and effects in terms of musical structure and lyrical content were identified.

In the final year, with a view to future research development, the audiovisual materials of Yamabamono, a group of works common to the three Bungo schools (Tomimoto-bushi, Tokiwazu-bushi and Kiyomoto-bushi), were comparatively analysed. As a result, changes in the lyrics of the three schools became clear, as did the relationship between joruri and shamisen in the common lyrics, leading to the development of this research method.

研究分野：三味線音楽研究

キーワード：常磐津節 豊後計浄瑠璃 三味線音楽 音楽分析

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景として、主に以下の三点があった。

常磐津節の公刊譜がほぼ皆無：

音楽研究の手法としては「公刊譜」を用いた分析が考えられるが、常磐津節の場合は公刊譜がほぼ皆無という現状があり、そのことが常磐津節の音楽研究の最初の壁になっている。実際、常磐津節の現行曲は100曲余あるが(参考：『日本音楽大事典』、平凡社、1989年)そのうち公刊譜は邦楽社から6冊7曲(うち2曲は作品のごく一部)が「文化譜」の記譜体系で、また1曲が常磐津標準譜本刊行会から「研精会譜」の記譜体系で刊行されているに過ぎない。本研究の学術的背景には、このような「音楽分析の材料そのものの不足」がある。

先行研究における採譜音源の検証が困難：

関連する先行研究としては、三味線音楽研究の先駆けである町田嘉聲の「三味線声曲における旋律型の研究」(『東洋音楽研究』47号、東洋音楽学会、pp.37 - 100、1982年)がある。町田氏は、三味線音楽に共通する旋律型を通ジャンルの的に整理すべく、全体で566もの五線譜による旋律型の譜例を提示し、三味線音楽の音楽研究に豊かな示唆を与えてくれる。しかし、常磐津節の譜例はわずか23例である上、採譜音源が明示されていないため、第三者の検証が困難である。また、ひとつの旋律型に対して複数の演奏音源の比較を行っているわけではないので、個々の演奏による相違を検討した上で旋律型を抽出するには至っていない。以上のような、「旋律型」確定の過程の明確化や、「旋律型」の客観性担保への視点が十分でないことが、本研究の学術背景にある。

浄瑠璃(常磐津節の声のパート)の音楽分析の不足：

これまでの三味線音楽の音楽研究は、三味線パートの分析を中心とする傾向があった。三味線音楽には三味線パートが音楽全体を牽引する傾向がより強いジャンルもあり(長唄や地歌など)そこでは三味線パートの音楽分析が有効であり、実際、そうしたジャンルでは三味線音楽研究が進んでいる。しかし、常磐津節は三味線音楽の中でも「語りもの」に分類され、浄瑠璃(声のパート)の節(旋律的な部分)と詞(セリフ)両者の中間的な部分が相まって音楽的な特徴を形成する。一方の三味線は、浄瑠璃を下支えする役割を担う(もっとも「合方(あいかた)」と呼ばれる間奏部分で三味線が活躍する部分はある)。したがって、常磐津節の音楽研究を進めるためには、浄瑠璃パートそのものや、三味線と浄瑠璃パートの相互関係に着目した分析が不可欠という学術的背景がある。

2. 研究の目的

常磐津節は素浄瑠璃(演奏会形式)のほか、歌舞伎や日本舞踊とも緊密に関連してきた代表的な三味線音楽であるが、音楽そのものの研究は進んでいない。その原因の一つは、公刊譜がほとんどないことにあると考える。そこで本研究では、**常磐津節音楽分析の基礎となる「譜」を五線譜で提示し、「譜」を用いた音楽分析によって音楽構造を明らかにする手法を確立すること、を目的とする。**

3. 研究の方法

常磐津節の音楽構造分析に適した「旋律型」の提示：

本研究のキーワードとなる常磐津節における「旋律型」を、演奏音源より確定して提示する。同一作品に対して異なる演奏家による複数音源を選んで五線譜に採譜する。その際、音源の第一の選択基準を、芸系の異なる複数の演奏家の音源とする。これは、複数の芸系の演奏比較により、両者に共通する「芸系に左右されない」旋律型を抽出することができるからである。また、第二の音源選択基準を、素浄瑠璃の市販音源を最優先とする。

「旋律型」を用いた常磐津節作品の音楽構造分析の実施：

実際に常磐津節作品における「旋律型」の配置および機能を、浄瑠璃パート、三味線パート、両者の相互関係の3点より分析し、音楽構造を明らかにする。分析は、の五線譜採譜の比較分析によって実施し、「旋律型」の基本部分を確定する。

常磐津節の作品分類と「旋律型」による音楽構造の関係を整理：

常磐津節作品における異なる作品分類(「祝儀もの」、「時代もの」など)における音楽構造の「特徴」と「共通性」を整理する。で取り出した「旋律型」を、作品構成部分(置浄瑠璃、出端、道行、物語、チラシ、段切れなど)に照らし、構成法の傾向を「旋律型」の機能として整理する。その際、浄瑠璃パート、三味線パート、両者の相互関係の3点から分析し、旋律型の機能を特徴付ける推進力がいずれに拠るのか検証する。

豊後三流との「旋律型」比較：

今後の研究の展開を見据えて、常磐津節と関係の深い、常磐津節を含む豊後三流(富本節、常磐津節、清元節)の「山姥物」について、音源からの五線譜採譜を行い、詞章の比較、音楽の比較(浄瑠璃パート、三味線パート、両者の相互関係の比較分析)を実施して、作詞・作曲の特徴と傾向を明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、主に以下の成果があった。

東京藝術大学附属図書館所蔵の邦楽調査掛による**常磐津節五線譜について、事業の目的や経過を整理するとともに、現存する当該常磐津節五線譜の検証**を行った（「邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の考察」、『無形文化遺産研究報告』第14号 pp. 51-78、東京文化財研究所、2020年3月）。

儀式性の高い「祝儀もの」の事例分析として《子宝三番叟》を取り上げ、3種類の音源から五線譜に採譜し、音楽分析を試みた上で、旋律（浄瑠璃の節、三味線の手）、リズム、ノリ（テンポ感およびその変化）、浄瑠璃と三味線の合い口（両パートの相関関係）の4つの観点から分析し、最大公約数としての作品の骨格を明らかにした（「常磐津節《子宝三番叟》の音楽分析」、『桐朋学園大学研究紀要』第46集、pp.1-17 桐朋学園大学、2020年）。

ドラマティックで筋立てが明確な「時代もの」の事例分析として、《忍夜恋曲者》（通称：将門）を取り上げ、音源より五線譜に採譜し、「場」および「芸系」の多様性を前提として作品の「骨格部分」（「場」や「芸系」により変わらない共通部分）を抽出して基本的な音楽構造を明らかにした（「常磐津節《将門》の音楽分析 オトシ と ナガシ の機能をめぐって」、『桐朋学園大学研究紀要』第47集 pp.53-67、桐朋学園大学、2021年）。

今後の研究の展開を視野に入れ、現在はほぼ伝承が衰滅している富本節、常磐津節、清元節の豊後三流に共通する作品群「山姥物」を取り上げ、音源から採譜を行ったのち、三流派間の詞章比較と節付け・手付の比較分析を行い、三流派間の詞章の変遷やその意図を明らかにし、共通する詞章部分の浄瑠璃と三味線の関係を分析、比較することにより、各流派の詞章への節付けや手付の特徴を明らかにした（「豊後三流の『山姥』考 文化財保護委員会作成の富本節レコードを起点に」、『桐朋学園大学研究紀要』第49集、桐朋学園大学、2023年掲載予定）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 前原恵美	4. 巻 49
2. 論文標題 豊後三流の『山姥』考 文化財保護委員会作成の富本節レコードを起点に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 桐朋学園大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 予定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美	4. 巻 47
2. 論文標題 常磐津節《将門》の音楽分析 オトシ と ナガシ の機能をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桐朋学園大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 53-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美	4. 巻 46
2. 論文標題 常磐津節《子宝三番叟》の音楽分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桐朋学園大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 前原恵美	4. 巻 14
2. 論文標題 邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 無形文化遺産研究報告	6. 最初と最後の頁 51-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------